別添2

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、
幼保小の先生が一緒に子供の姿から話し合おう

令和４年３月３１日

文　部　科　学　省

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）の位置づけ

○「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」（初版）においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら、架け橋期のカリキュラムを策定できるよう工夫することとしている。

○本参考資料（初版）は、幼保小の先生方が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通理解のもとに、子供の姿を中心に据えて話し合うことができるよう作成したものである。

※取組の状況等を踏まえ、手引き（初版）とともに、本参考資料（初版）の更なる改善・充実を図る。

幼保小の架け橋プログラムの実施向けての手引きの参考資料（初版）の目次

1．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

活動の中での具体的な幼児の姿について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに捉える例を示している。

2．事例を通して考えてみる

園と小学校の先生が協議をし互いに理解を深めていくうえでの手掛かりとなるような具体的な事例を示している。

- **記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める**
- **幼児と児童の交流**
- **生活科を中心としたスタートカリキュラム**
- **生活科　アサガオ栽培**
- **国語科(4月）**
- **算数科（4月）**
- **音楽科（5月）**
- **図画工作科（4月）**
- **体育科（5月）**
- **要録を作成し、小学校教育へつなげる**
- **園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援**
- **ICT機器を活用した幼児の豊かな体験**

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり・環境の構成や小学校へのつながり

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、先生の関わりや環境の構成の改善・充実、幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくのかのイメージの共有の手掛かりとして活用できるよう、整理して示している。

4．幼児教育アドバイザーの配置等の主な成果

自治体における幼児教育アドバイザーを活用した取組例とその成果の例を紹介している。

１．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

自らの興味や関心に応じて、思うがままに環境と関わる中で、様々な体験を積み重ねていく。その具体的な姿について「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに捉える。

活動の中での具体的な幼児の姿を通して、幼保小の先生方が話し合うことが大切である。ここでは、幼児が自分達で考えたお店屋さんごっこ（クレープ屋さんの場合）を例に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を捉えてみる。

健康な心と体

明日、クレープ屋さんをやりたいと思って、お店に必要な小道具を考えて準備する

自立心

自分達で考えたお店作りが、自分達の力で実現できた達成感、友達が喜ぶ充実感を味わう

協同性

実現したいお店のイメージを友達と共有し、役割分担したり協力したりしながらごっこ遊びを展開する

道徳性・規範意識の芽生え

やりたいことが友達と異なる時には、折り合いをつけながらきまりをつくる

社会生活との関わり

楽しかった地域のお祭りの経験を友達と共有し、かっこよかったクレープ屋さんを再現してみたいと考える

興味や関心に応じて遊びに没頭する
10の姿が絡み合って現れてくる

楽しい

一緒にやりたい

本物らしくしたい

〔今後体験してほしい〕
共通の目的の実現に向けて協力したり、時には互いの思いがぶつかりあう中で、相手の立場になって考えたり、互いが納得できる代案を考えたりしてほしい。

〔過去の体験〕
絵をかいた時に、カラフルに色を塗って楽しんでいたので、また、カラフルにしたいと思ったのかな。

思考力の芽生え

ふさわしい材料を考えてクレープに見立て、より本物らしい見え方を試行錯誤する

自然への関わり・生命尊重

クレープを持って園庭や公園へピクニックに出かけ、花を愛でたり風の気持ちよさを感じたりする

数量や図形、標識や文字などへの関心･感覚

生活の中にある文字や数字を使ってみると、お店が本物らしくなり楽しくなることを知る

言葉による伝え合い

興味を持った出店について友達と意見交換し、自分の思いが伝わる表現を工夫したりしながら話し合う

豊かな感性と表現

クレープ生地に具材を置くときに、カラフルできれいにみえるようにするなど、自分なりの表現を楽しむ

1．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、どのような姿が見られるのか、実際の保育の場面を取り上げて語り合うことが大切である。

こうじゃない？…え？こう？！

1学期から続くヒーローごっこ。園内パトロールをしたり、困ったことを解決したり、だんだん本格的にヒーローになりきって遊ぶようになってくると、マントや剣などのアイテムもこだわって作るようになってきました！年長組が作るような芯を2つ繋げた（突き通した）かっこいい剣を作りたい！！突き通すためには、短い芯にどうやって穴を開ければいいんだろう…？ハサミを挿して穴を開けて チョキチョキ切っても穴が大きすぎたり、切れてしまったり…

「あ～もう、うまくいかないな～」の繰り返し…。

「ここ切ったらいいんじゃない？」「もっとこうしたらいいかも」「え？ここ？」とアイディアを出し合い、友達と一緒に試行錯誤の連続。「いいかも！」「ほんとだ！」「おぉ～～！」「できた！！」ひらめいた！気がついた！見つけた！

こうして工夫を重ねながら仕上げた自慢のアイテム。見てください このポーズ!! この過程がつまっているからこそこの最高の表情となりきり感々

試行錯誤の時は沢山悩んで考えたけれど、だからこそ良い方法を自分たちで見つけ出した時の喜び、嬉しさ、達成感は大きいのだと思います。子どもの力を信じて見守る、そんな援助を心掛けていきたいと思います!!

「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章2.（6）事例2の学級だより

どんな姿が見られるか幼保小の先生たちで一緒に考えてみましょう。

※子供の姿を語り合うプロセスを積み重ねることが大切です。

○ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

○ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

○ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

○ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

○ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

・
・
・

※様々な場面での保育や授業における子供の写真や動画を用いて、幼保小の先生方で話し合うことが大切。

２．事例を通して考えてみる　～記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める～

「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章2.（4）事例4概要（一部修正）

園と小学校の先生が、保育参観や５歳児担任の記録を基に、幼児の育ちや園教育と小学校教育の学びのつながり、先生の関わりについて合同協議を行った。保育参観では、幼児が関わりながら土山で水路や温泉を作る遊びを取り上げ、幼児の姿から何に興味・関心をもって楽しんでいるのか、どのような力が育とうとしているのかなどの視点を設定した。協議では、具体的に見られた幼児の姿について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして、意見交換を行った。

＜土山遊びのねらいと内容＞

・ねらい：土や水の感触を味わうとともに、友達とイメージを共有し、自分なりに試したり考えたりしながら、友達と力を合わせて作る楽しさを味わう。

・内　容：友達とイメージを共有しながら、力を合わせて大きな土山での水路作りをして遊ぶ。

＜保育参観の視点＞

・遊びの姿から、何に興味や関心をもって楽しんでいるのか

・遊びの中で、どのような力が育とうとしているのか（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに）

・育ちを支える園の先生のかかわり（環境の構成）について

＜担任の記録＞

幼児の姿	先生の読み取りと願い
水路のある部分で、Ｓ児、Ｒ児、Ｔ児が土を深く掘り水をため、「温泉にしよう」と言っている。Ｓ児が「どれくらい深くなったかな」と言いながら裸足で入っていく。他の幼児も手を止め入っていき、「キャー！」と叫びながら、笑顔で手を取り合って喜んでいる。Ｒ児が「ここ、めっちゃ深い」と言うと、Ｔ児が「どこどこ？」と近づき深さを確かめる。その後、Ｒ児は水から出て、足のぬれている境目の部分を指差し、「ここ（ひざ）くらいまで！」と驚いていた。 一方、Ｍ児が水の深いところ（温泉）と浅いところ（川）を行ったり来たりしている。Ｍ児が「こっちは冷たい」と言ったので先生も川に入り、「本当だ！」と驚いて伝えた。その声を聞いた周りの幼児たちが関心をもち始め、同じように行き来して確かめ、水温の差に驚いている。先生が「何でだろうね」とつぶやくが、幼児たちはあちこちを歩き回り、「ここがめっちゃあったかい」などと知らせ合っている。	水がたまった場所を掘り進め深い温泉にしたいと考えた。 Ｓ児は見た目ではよく分からない水の深さを確かめたいと思い、R児とT児も続いた。裸足で浸かる水の気持ちよさと、自分たちが掘った深さを感じ、喜び合っている。 水の中では感覚的に深さを感じていたが、足の濡れている境目を見て、改めてどれくらい深いかを実感している。 M児が場所によって水温が違うことに気付き、繰り返しその違いを味わっていた。先生は、驚きを一緒に感じたいと思い、M児をまねてみた。そのやり取りに気付いた周りの幼児も水に入り、水温の差を感じ、驚き面白がっていた。 先生は、なぜ水温が違うのか一緒に考えたいと思い「何でだろうね」とつぶやいたが、幼児たちはどこが温かいのか冷たいのか探ることを楽しんでいた。こうした体験を積み重ねていくことで、どうして水温が違うのか、なぜ温度が変わるのか、予想したり試したりして考えることを楽しみたい。

２．事例を通して考えてみる ～記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める～

【保育参観後の協議】　　「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章2.（4）事例4概要（一部修正）

視点①幼児にどのような力が育とうとしているかについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに考える

園と小学校の先生からは、主に以下のような意見があった。

・友達と深い温泉を作ろうという共通の目的を見出し、工夫したり協力したりする姿
　→「協同性」の「共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したり」する姿
・互いに気づいたことを伝えあい刺激し合う姿
　→「言葉による伝え合い」の「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり」する姿
・自分なりに水溜りの深さを確かめるための方法を考えてやってみる姿
　→「思考力の芽生え」の「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したり」する姿、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の「遊びや生活の中で、自らの必要感に基づき、数量や図形」への「興味や関心、感覚をもつようになる」姿

視点②育ちつつある姿が、小学校の教育のどのような場面につながるかを考える

小学校の先生から、以下のような意見があった。

・「水溜りの深さ」を試行錯誤して確かめる体験は、水のかさなどについて調べる中で、実感を伴った理解につながる。
・学んだことを日常生活の中で活用し、主体的に問題を解決する態度にもつながる。

視点③園の先生や小学校の先生の関わりについて、大切にしていることを共有する

小学校の先生からは主に次のような意見があった。

・先生は、場所により水温が違うことを発見し、不思議に思ったり水の深さに着目する幼児の姿を見逃さず、一緒に楽しんで見せていた。意図的に教えなかったと知り、驚いた。
・園では繰り返し取り組みながら学んでいける。その体験が小学校以降、物事に関心をもち、その理解を確かなものにしていくことにつながると感じた。

園の先生からは次のような意見があった。

・幼児はいろいろな場所の温度を確かめたり、温度差を肌で感じることを楽しんでいる段階と思い、調べて回り温度差を味わうことが大事と判断した。遊びを繰り返す中で、理由を予想したり、仮定して試したりしていきたい。
・幼児教育では、すごい、おもしろい、なぜだろうといった気付きをどう深めるか、その過程を大事にしている。

この事例を通して、例えば、次のようなことが分かった。

・保育参観は参観と協議の視点を示して行うこと、幼児の具体的な姿や先生の関わりの意図を示した記録を基に協議を行うことで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた幼児理解ができる。また、「園の先生が自分たちの保育に対する評価を行う場とするだけでなく、小学校の先生の幼児教育への理解を深める場とする」、「園の先生が小学校教育について学び、幼児の学びの見通しをもつ」などといったよさが見えてきた。このように、互恵性のある合同協議の場となるよう、協議の事前準備やその方法を工夫して進めることが大切。

２．事例を通して考えてみる　～幼児と児童の交流～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例5概要

5歳児と小学校1年生の交流（七夕製作）。交流活動では、幼児児童それぞれにねらいを設定するとともに、共通のねらいを設定。交流活動は2学級に分かれて別日程で実施し、事前の話し合い→準備→交流活動→振り返りを行った。最初の交流活動では、児童が一人一人の幼児に寄り添い丁寧に教えながら七夕飾りを製作している様子が見られ、幼児も落ち着いて活動できていた。

最初の交流活動を園と小学校の先生が一緒に振り返ってみると

・楽しく活動をしており、ねらいもおおむね達成できていた
・小学校の先生の指示がとても的確でスムーズな交流活動ができた

しかし、次第に「自分でできることをやってもらっている幼児にとって交流の中での学びは何か」といった意見もでてきたので、幼児・児童それぞれにおける学びについて意見交換を行った。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして活用した。活動を通して、主として次のような姿が見られたとの意見がでた。

・いろいろな人と親しみをもって関わる姿や、どのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）
・自己紹介をする、相手に作り方を教える､願い事を伝える、話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）
・４つの種類の製作を時間内で作るという課題に対して、見通しをもつ力（健康な心と体）

話し合ううちに、園の先生からは次のような意見があった。

・指示により安心して活動できるが、幼児が考える余地があれば、違う立場の人との関わり方を考える姿（社会生活との関わり）、時間の使い方やどの製作をするか等見通しをもって行動する姿（健康な心と体）がみられるのではないか
・園では幼児同士が助け合ったりしているが、交流会では全員がお世話される側の印象。幼児が能動的に行動する姿や児童と一緒に目的に向かって取り組む姿があまり見られなかった(自立心、協同性)
・願い事の短冊は書けないところのみ手伝ってもらう方がいいのではないか（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）

小学校の先生からは次のような意見があった。

・製作が得意であったり、リーダーシップをとれたりする幼児がいることがわかった
・同学年の中ではなかなか力を出せないが、今日は自信をもって活動できていた(自立心)
・年下の子に何かしてあげたいという気持ちからがんばろうとする姿も見られた(社会生活との関わり)

2．事例を通して考えてみる　～幼児と児童の交流～

さらに、先生の子供への関わり方についても話し合いが及んだ。
小学校の先生からは次のような意見があった。

・園の先生は、認めたり、共感したりと子供たちにその場で直接的な関わりをすることが多いように思った。児童には自分なりに考えさせ、結果を自分で受け止めさせたい

園の先生からは次のような意見があった。

・園では、認めて伸ばす、共感するということを大切にしている
・幼児は遊んでいるそのときに楽しさや満足感を味わえないと次回へと気持ちが続かないので早めに援助しやすいかも

そして、子供たちの発達を踏まえた対応の違い等に戸惑ったとの意見があった。次回の交流活動では互いの指導をよく見合い、互いの教育についてもっと理解し合う必要があること、子供たち同士の交流を大事にするため、子供たちがつくり上げようとする世界をもっと大切することを確認し合った。また、先生は1年生に「～してください」などの指示を控え、4種類全ての製作を目指すのではなく、何をどれだけ作るかも子供たちに考えさせた。

次の交流活動を園と小学校の先生が一緒に振り返る中で、次のような意見があった。

・前回同様、児童や幼児が交流活動を通していろいろな人と親しみをもって関わる姿やどのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）、相手に作り方を教える､話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）、見通しをもって活動する姿（健康な心と体）などが見られた
・子供たち自身でグループ内の関係つくりができるようにし、活動も各グループに任せることにした結果、「『皆で』とか『私たち』という言葉が聞かれ、一つのめあてにむかって、児童も幼児も一緒になって取り組む姿が見られた(協同性)。そのことによって、達成感も見られた(自立心)
・輪飾りの数を数えたり、長さを測ったりする活動にも広がったり、幼児にとっては文字を書く機会もできた(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)

この事例を通して、例えば、次のようなことが分かった。

・交流活動の振り返りの積み重ねが子供たちに対してより意味のある活動になるかどうかのポイント
・幼児と児童の交流は、双方の子供たちの育ちの上で有意義であるだけでなく、双方の先生にとっても同じ場面の子供の育ちの姿を話題にしていくことで、それぞれの学校種の指導方法や教育観などを理解する良い機会となっている